

リニューアル版

あいあい草創期の秘話 ⑪

(この章は、2012年2月に書いたものを加筆修正)

「大津あいあい保育園の歌」は、これまでの間に何人の人たちにどれほど歌われてきたことだろうか。毎日、大勢の子どもたちが歌い続けているから、その延べ回数はすでに100万回にも及ぶのではないだろうか。子どもたちの心と記憶の中に、しっかりと定着しているに違いない。
(2012. 2. 10)

大津あいあい保育園 創業者(理事著) 下村 勉

難産で誕生した「あいあいの歌」

開園2年前の1999年4月、私たちは本格的に開園をめざす仕事に入った。園舎の設計、資金計画、法人設立手続きなど、さまざまな仕事待ち受けていた。その中に、「園の歌」を作る仕事があった。これは信頼できる二人の方に作詞と作曲をお願いしたところ、いずれも快く引き受けてもらった。

作詞は、初代園長となる下村京子の無二の親友・大下二三子さんをお願いした。大下さんは、永く大津の保育に携わり、大津の保育の内実を作り出してきた人であるとともに、当園の創立に大きな期待を寄せていただいたお一人である。依頼したときは、大津市の児童家庭課で超多忙な毎日を過ごしておられる時期だった。「歌」には当然、「あいあい」の理念を織り込む必要があったが、大下さんには新しい保育園の園名と「あいがいっぱい であいがいっぱい」という「園の願い」だけを伝えて、あとはすべてを任せた。

一方、作曲はある音楽の大家をお願いした。その人からは、何度も「まだ歌詞はできないのか」と催促を受けた。時間をかけてでき上がった歌詞は、「春・夏・秋・冬」を4番まで歌い継ぎ、それぞれに、「あいあい」の理念が見事に詠み込まれていた。京子は四季の移ろいを保育の中に生かすことを大切にしていたが、そのことを大下さんはよく知っていた。そして、京子がどんな保育をめざしているのか十分に分かっていたので、それを盛り込むことに苦心されたようだ。私たちの思いをふんだんにちりばめた作品だった。

予想外の作曲者

早速、できあがった歌詞を携えて、作曲の依頼に向かった。ところが、その先生は苦渋の表情を浮かべて、「少し事情があって…」と言われた。何か予想外の事情が発生して引き受けられなくなったようだ。これは無理をお願いする場合ではない。すぐに引き下がった。

しかし、困ったことになった。ほかに作曲を頼めるあてはなかった。そこで、「どうしたものか」と大下さんを訪ねた。すると、「私の方で、心当たりを探してみます」という返事。願ってもないことだった。

それから数か月。作曲ができたとの連絡を受けた。「どなたに依頼していただいたのかな？」と興味津々だった。できあがった楽譜を見て驚いた。作曲者は「大下かずお」となっていた。これは作詞者のお連れ合いに他ならない。なんと、こんなに身近なところに、立派な作曲者がいたのを失念していた。全く予想外のことだった。

こうして、「大津あいあい保育園の歌」ができあがった。開園直前の発行をめざしていた「あいあいパンフ」No.1に辛うじて収録することができた。難産を経て完成した「あいあいの歌」は、多くの人たちにそれからずっと長く、歌い継がれることになった。

